

次なる日加関係を想う

日加経済人会議日本委員会会長

榎田久生

日加国交樹立五十周年と伺い、カナダという国の若さを今更ながら感ずる一方、私個人のカナダとの関係がすでに二十有余年に及んでいることを想うと、或る種の輻輳した感慨にうたれるのである。

私共鉄鋼業が、原料供給先の多様化を計る為にカナダの石炭開発を手がけて、初めての出荷がなされたのは一九五八年、トン数にして僅か五千トンにすぎなかった。それが二十年後の一九七八年には、不景気の最中とは言え、千六百万トンに及ぶに至った事実ひとつを見ても、日加両国間の交易状況が、いかに加速度的に拡大されたか、理解されよう。

いろいろな意味で、今日迄五十年間の日加交流は、日本から見ると限りにおいては無難で問題の少なかった時代であったと言えるが、カナダには、資源・素材を日本に売り、日本からは製品がカナダに

十六万五千二百二十六ドルへ落ち込んだ。一九三〇年代における日本の対加輸出は、絹貿易の大幅縮小から回復することはなかった。ナイロンが開発されたからである。日本綿製品も、アジア各国から追いつけられていた。

一九三九年、最後の絹輸送特別列車がカナダを横断した。日本の対加輸出は一

流入するというのでは面白くないという見方もあるようだ。しかし買い手のない資源は、路傍の石にすぎず、また付加価値が少なくいっても、恒常的資源輸出による外貨獲得は、カナダ経済にとって多大の貢献をなしていることも事実であろう。

ビジネス、或いは貿易というものは、「ねばならぬ」という建前論で取り扱われるものでなく、むしろ、売り手買い手双方の希望条件がマッチした時に初めて合意・契約に至るものである。したがって、いたずらに声高く、プロパガンダを打ち上げるよりは、案件ごとに問題点を解決していくという態度が何よりも大切だということを、我々日加双方の当事者が肝に銘じているわけで、この点でも無用の葛藤を避けてきたと言えよう。

具体的な問題点を卒直に話し合うことが日加両国にとって今何よりも必要な点だ、という問題意識にたつて、一九七六年訪加した私共使節団はカナダの官民の方々と意見交換を行った。私共旅行者の見た印象、それは、或いは近視眼的であったかも知れない。間違った意見もあったであろう。しかしながら、「何を考えているか判らない、無発言をきめ込む日本

九四〇年に五百八十八万七千三百三十ドルに回復しただけだった。カナダの対日輸出は三〇年代にかなりもち直し、一九三九年には二十八万八千六百七十八万九千二百ドルに達したが、戦雲がアジアをおお

一九四一年、太平洋戦争が勃発した。ようやく確立され、大きな発展が期待さ

人」と評されがちな私共が、自分達の考えをストレートに申し上げたことが、何かしら新しい動きを起す「引き金」になったのも事実ではなかろうか。

その際、私共は日加経済人同士による恒常的話し合いの場を組織することを提案した。その結果、幸いにも、カナダ東西実業人のトップの方々を網羅する第一回の会議を、昨年東京で開催することができた。この会議が成功であったか否かは、当事者である私が客観的に評価出来るものではない。ただ、我々が積極的に日本経済が内包する問題点、日本市場のメカニズム等について、カナダの友人の方々にご理解頂くべく、全力を尽したことだけは事実である。また連日顔をつき合わせているうちに、相互間により深い人間性の理解が芽生えてきたことも確かである。国と国とのつき合い、あるいはビジネスといっても、所詮は人間同士のつき合いであつてみれば、コンスタントに同じ顔が話し合い、自分の会社の問題にまで発展出来るならば次の五十年の日加関係は期して待つべきものがあると言つては、抒情派ビジネスマンとの誹りを受けることにならうか。

れていた日加貿易は、戦争によって中断されてしまった。

戦後、日本は灰じんの中から奇跡的に立ち上った。

占領軍当局は、日本経済に活力を吹き込むために、外国のバイヤーに日本訪問を奨励した。カナダからも、おもちゃ、織物など各種の品物を買うため、多くのバイヤーが日本を訪れた。日本の対加輸出は次第にふえ、一九五〇年には千二百萬ドルに達した。綿製品（三百八十萬ドル）を筆頭に、絹およびその他の織物、おもちゃ、人形、みかん、陶器が主な対加輸出品であった。日本の輸入は厳しい外国為替管理によって制限されていたが、一九五〇年にはカナダから二千万ドル相当の品物を輸入している。

戦後の発展

一九五〇年六月に朝鮮戦争が勃発し、日本経済に予期しないブームをもたらした。生産性は一挙に一九三四一六年頃の水準を抜き、日本は輸入をふやすことが出来るようになった。日本の対加輸入も、一九五一年に七千三百万ドル、一九五二年には一億二百万ドルに急増している。

カナダは、やがて、復興を遂げた日本からカメラ、双眼鏡、測量機器、顕微鏡などを購入するようになった。これらはいずれも品質がきわめてすぐれていて、カナダにおける日本製品のイメージを高めた。

一九五二年、日本はトロントのカナダ国際貿易博覧会に初めて参加し、さまざまな製品を出品した。それ以来、カナダで開かれる大手の貿易展で、日本の製品は必ずといっていいほど顔を出している。